様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３１３３

研究課題名（和文）人類学的手法を用いた武術思想の実践的研究：新陰流を事例にして

研究課題名（英文）A study of martial art thought using anthropological method: Case study of Shinkage-ryu

研究代表者
中嶋　哲也（Nakajima, Tetsuya）

茨城大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０６１３９２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では代表的な古流剣術である新陰流の道場を参与観察し、①形に込められた思想、②形の実践方法、③形の復元方法についてそれぞれ明らかにすることを目指した。
①については、相手の攻撃動作を出し切らせつつそれを捌くことで、こちらは優位な立場を維持しつつ相手を殺傷せずして勝つことに見出せるのではないかと論じた。②については、柔道や剣道などの近代武道において形は決められた所作を反復するものと一般に考えられているが、古流では太刀の基本的な使用法は順守しつつも、決められた所作を逸脱して自由に打ち合う稽古が行われていることを明らかにした。
③についてはコロナ禍もあり、調査できずに課題として残された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的意義としては前近代に成立する流派武術の実践形態の参与観察はこれまでの研究では　行われてこなかった。そのため、史料を用いた歴史学的研究がなされるにしても、当該流派の実態をブラックボックスのままに史料の考察が進められてきたといえよう。本研究は新陰流に限定されるが、実践形態を約15年間参与観察した結果を民族誌的にまとめてきた。これによって、歴史学的研究をする際にも有用な知見を提供できるのではないかと考えられる。
社会的意義としては、武道の形の捉え方を豊かにできたのではないかと考える。

研究成果の概要（英文）：　This study did fieldwork in training hall of Shinkageryu-ryu, the ancient Japanese swordsmanship. This study set three research questions: first, what kind of thought is put into the Kata(set movement), and the second is how the Kata is practiced, and finally is how the kata is restored in training hall.
As for the first issue, this study analyzed the procedures of kata and argued that we can find an idea that is not just a technique for killing each other. As a concrete evidence, it was confirmed that there were many moments when one could handle the opponent's attack and maintain a dominant position while not hitting the opponent's body with the sword. With regard to the second research question, in Shinkage-ryu, they use kata as a model to learn how to basically handle the sword. After learning how to handle the sword, the practice was relatively free to deviate from the kata and experiment with various movements.
Because of COVID-19, the third issue could not be investigated.

研究分野：スポーツ人類学、武道論

キーワード：新陰流　武道　形　刀法　表太刀　砕き　非切

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

これまで武術流派が研究に資すると考えられてきたのは、武術流派の伝書から東洋思想を考察することができるためであった。例えば、スポーツ人類学者の寒川恒夫は「武道は歴史を持つ。自身を語った驚くほど豊かな史料を持っている。しかも、その内容が特異である。それは、史料作成者が儒教、仏教、道教、神道の哲理を深くおさめた武士や僧侶であったためである。そしてそこには、武道の在り方や武の技をめぐる修行論が東洋の哲学をもって語られている」（寒川恒夫,『日本武道と東洋思想』，平凡社，2014 年，pp.1-2）と述べている。

とくに先行研究では武術流派における身体実践を通じた心の変容の問題が扱われてきた。その代表的な研究者として日本思想史の源了圓が挙げられる。源は、「日本文化と日本人の性格形成の関わり」（源了圓,『型』，創文社，1989 年，p.312）を解明するため、武術流派の身体実践を通じて「現にある心の状態をあるべき状態へと高め深めてゆく」（源了圓,『型』，創文社，1989 年，p.165）心法の在り様を研究した。さらに日本を越えて、より広く東洋的身心論の具体的展開として武道を論じたのが湯浅泰雄であった。湯浅は東洋的な修行法の一つとして武道の特徴を「身体の訓練は同時に心の訓練であり、それは心の向上、つまり人格の成長や人間性の変革といった、人生の生き方の問題につながっていくのです」（湯浅泰雄,『気・修行・身体』，1986 年，p.101）と述べている。

しかし、先行研究では武術流派の身体実践が心の変容に介在すると述べつつも、身体実践が具体的にどのように心の変容に関わるのかは論じられてこなかった。心法を含め、武術流派の思想を稽古の実態を踏まえずに把握することは困難である。各流派における身体実践は形稽古が中心となるが、この形の所作の組み立てられ方や学習過程にこそ各流派の思想が見出されると考えられるからである。また、伝書は当該流派の人々の習熟度に応じて発給されるため、形稽古に習熟することが当該流派の伝書についての理解を深めることにつながると考えられる。そこで、形稽古の習熟とともに伝書読解が深まる過程を研究するためには、人類学的なフィールドワークが必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究で調査した武術流派は新陰流である。新陰流とは、上泉伊勢守信綱（1508～1573）によって創始された剣術流派である。上泉の弟子である柳生宗厳（1529～1606）は師より学んだ新陰流に独自の工夫を加え、のちに“柳生新陰流”と呼ばれることになる一流を創始する。柳生新陰流は徳川家康の庇護を受け、将軍家の流儀として伝承された。新陰流の道場は各地に残るが、申請者が調査を行うのは、Y 氏が主宰する古流剣術の稽古会である。Y 氏の家系は尾張藩士の家に遡り、先祖は尾張藩で伝承された新陰流の道場に出入りし、尾張柳生家代々の伝承を補佐する立場にあったという。そのため、新陰流の稽古が中心であるが、その他に一刀流も稽古していることから、Y 氏は古流剣術の稽古会を名乗っている。

新陰流の先行研究としては、加藤純一著『柳生新陰流の研究』（文理，2003 年）が挙げられる。同書は加藤氏の博士論文を元にしているが、「伝書類を取り上げ」、そこに現われた「武道思想」について検討する思想史研究である（加藤，2003，pp.11-12）。一方、新陰流の思想を解明するために自らが稽古に参加する人類学的研究はこれまで見られない。

こうした学術的背景を踏まえて本研究では、3 つの課題に取り組んだ。

（ア）　新陰流の組太刀（＝形）がどのような刀法から構成されているのかを明らかにする。
（イ）　刀法がどのように学習されるのか、実際の組太刀の稽古に参加し、実態を解明する。
（ウ）　刀法の習熟と伝書読解の深化との相互変容の過程を考察する。

まず課題（ア）について、従来の武術流派の研究では組太刀の稽古が刀法を学ぶための方便であるという視点が欠落していた。刀法とは各流派における基本的な刀の使い方であり、組太刀はいわばその範例である。組太刀の太刀筋に身体の動きを調和させることを通じて、刀法は学ばれるという。よって、刀法を解明することは組太刀の構造を明らかにすることにつながるとともに、その所作に込められた流派の思想を汲み取るてがかりにもなる。

次に課題（イ）について、前述のように新陰流では組太刀の所作を覚えることが目的ではなく、刀法を体得することが目指されている。では、組太刀という範例から具体的にどのように刀法を学ばせていくのか。また、刀法の習熟度はどのように判断されるのか。こうした点に着目して刀法が学ばれていく学習過程を明らかにしていく。

最後に課題（ウ）では「復元」作業を通じてどのように修行者の身心が変容していくのか、その変容が実践者本人による伝書読解の変化に現れると考え、その実際の機序を考察する。本研究も先行研究と同じく心の変容に着目するが、それは先行研究の関心事であった「日本人の性格形成」といった人格を問題にするのではなく、修行者が刀法に対する認識を変容させ、流派の思想について理解を深めていく過程を主たる問題にするためである。

３．研究の方法

稽古会では「復元」作業を稽古の中核に据えているが、これは伝書に記された思想が現在の新陰流に見出せない、あるいは現行の稽古のなかで「流派の思想」に触れた手応えを感じつつも、そこに確信が得られないがために行われているのである。研究会が探究している「流派の思想」は、自明なものとして常に稽古に内在しているのではなく、その都度、稽古や「復元」作業のなかで在らしめられようとしているものである。そのため稽古会にとって復元作業は、“古（いにしえ）を稽（かんがえ）今に照らす”という稽古の思想を体現する営みでもある。

こうした「復元」作業を調査するには、科学人類学者ブルーノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論から接近することは有意義だと考えられた。ラトゥールは従来の科学者が科学の合理性を主張するに留まり、実験途中の「混乱しており、曖昧で」なおかつ「無秩序」な段階を「ブラックボックス」にしていることを批判し、人とモノ（非人間）が多様に連関しながら科学的知識が構成されていく「作製段階の科学」を化学の実験室をフィールドワークすることで明るみに出した（ブルーノ・ラトゥール〔川崎勝・高田紀代志訳〕『科学が作られているとき』，産業図書，1999 年）。

研究会の「復元」作業は科学（歴史学）、伝書、刀法などといった異なる営みやモノを媒介にして流派の思想を見出そうとするものである。ただし、稽古会における探究は途上にあり、これまでも「復元」作業は試行錯誤の上に成り立ってきた。そこでまず、いつから「復元」作業は行われ、これまでどのような工夫、ひらめき、そして発見があったのか、Y 氏のオーラルヒストリーと史資料を交えて「復元」作業の歴史を明らかにしたい。また、研究会の「復元」作業がどのようなモノにまで関連するのかは申請者の観察のみでは判断し難い。そこで、本研究では Y 氏及び稽古に参加するメンバーに聞き取り調査を行い、現在、彼らが「復元」にあたってどのような事物やアイデアをそれに利用しているのかを明らかにした。

４．研究成果

課題（ア）と（イ）については、以下の論文で解明された。

中嶋哲也「フィールドワークによる源了圓の「型」概念の相対化：新陰流の稽古法に着目して」『体育学研究』65 巻，2020 年，pp.1－18.

本研究では日本武道の源流の 1 つである新陰流の道場をフィールドワークし、その成果をもとに源了圓の型概念を相対化することを目的とした。本研究が着目したのは武道の“型”である。型は武道の中核的かつユニークな実践である。しかし、これまでの文献研究者は武道の型に関する際立った研究成果は出せなかった。そもそも武道の文献には東洋思想によって言語化された武道の精神性や身体感覚の世界が記されることはあっても型の所作が詳細に記述されることは稀である。なぜなら型は実践されるもので、語るものではないからである。本研究はこうした文献研究では迫りきれなかった型の実践の様子にアプローチするためフィールドワークを行った。

本研究ではフィールドワークによって源の型概念を批判的に相対化することにした。なぜなら源の型の研究を相対化する武道の研究者は今のところみられないためである。源の型概念を検討してみて分かったことは、彼は型に同一の身体運動を反復する原理を見出していたことである。また源は、型は伝承文化として普遍性を獲得する途上で、それを制作した人物の人格や個性を消失していくと考えていたことが分かった。一方で源は、型は形式化された手順を反復するだけの練習になりがちであり、絶えず形骸化する恐れがあると主張していた。

次に課題（ア）の成果として、本研究で調査した新陰流の道場では、型に相当する概念として表太刀と刀法という 2 つの概念を用いていた。表太刀は源の型概念や組太刀に相当する。道場では表太刀の稽古を通して刀法を修得することが目的だと教えられた。刀法は新陰流の原則的な太刀の使い方のことであり、①太刀筋（太刀のベクトル）、②相手の袋竹刀の切っ先が落ちるところに先に踏み込むこと、③太刀は一挙動で振ることの 3 要素から成る。新陰流は相手と同じ長さの袋竹刀を使い、相手の拳を狙う技が大半を占めるが、それによって体格のハンディキャップを縮減し、相手と同じ間合いでフェアに戦う状況を設定している。さらに②と③の動作を守れば、あとは自分と相手との①太刀の角度だけ注意すれば負けないように表太刀は構成されているのである。表太刀はこうした刀法の幾何学的な仕組みを学ぶための範例であり、刀法は表太刀を構成してゆく力なのである。

次に課題（イ）の成果である。調査地の道場では表太刀の所作を反復するだけでなく、「砕き」と呼ばれる型と試合が混合されたような稽古がなされていた。砕きでは表太刀で学んだ刀法を応用したり、刀法の考え方を応用して表太刀に無い所作を用いたりすることで、手順通りに仕掛けてこない相手の攻撃に即応することが求められる稽古である。砕きでは未確定な相手の動きに応じて、こちら側は刀法に基づいて多様な所作を生成するのである。刀法は表太刀にない所作を生成する潜在性を秘めているのである。この砕きの稽古を通じて、稽古者は刀法の習熟度を、すなわち新陰流の実力を高めていたのである。

しかし、課題（ウ）については、論じきることができなかった。コロナ禍と重なったということもあるが、加えて、伝書読解の深まりを言語化するための概念装置が作り切れなかったためで

ある。この点は今後の課題として残った。ただし、研究の途上で新陰流の刀法に基づいた流派の思想については考察した。それについて以下の論文で発表した。

Tetsuya Nakajima. Japanese martial arts and the sublimation of violence: An ethnographic study of Shinkage-ryu. *Martial Arts Studies*, (6), 2018, pp.62-74.

同論文では、新陰流の技法が相手の身体部位に袋竹刀を打ち込む手前で相手の精一杯の攻撃を左右どちらかに捌くところに特徴があることを指摘した。新陰流の言葉でいえば太刀の「はたらき」をだし尽くさせ、その「はたらき」に随って廻りて勝つことである。新陰流ではこの太刀の「はたらき」を出し尽くさせるところで勝負をつけるところに流派の思想を見出しているものと思われる。その瞬間はまだ相手を切っていない、どちらも生きた状態である。ただし、相手が攻撃の動作を出し尽くした時には、こちらの位置取りや構えも適切に整えているので、相手は次の一手を打つポジションに立てないのである。このように互いの命のやりとりの直前で未然に暴力を封じ込めることが新陰流の思想ではないだろうか。このように結論づけた。

とはいえ、実際にはこのような位置関係になっても次の瞬間には相手の両拳の辺りを打つし、相手に対して優位な位置を取ることは相手にとって脅威であり、心理的には敵対心や復讐心を遺す可能性もある。これらの点について新陰流はどのような処理をしているのか、あるいは筆者の見通しが間違っているのか。伝書読解の深化とともに今後の課題としたい。

最後に、最終年度には新陰流から派生し、講道館柔道の源流となった起倒流柔道の「柔道」思想についても歴史学的な研究を発表した。以下の論文である。

中嶋哲也「起倒流における名辞「柔道」の出現とその背景：直信流との関係に着目して」『講道館柔道科学研究会紀要』18 輯，講道館，2021 年，pp.13-30.

コロナ禍でフィールドワークができなかったため、歴史学的な手法での研究となったが、これまで明らかではなかった起倒流における「柔道」という名辞の成立過程を明らかにできた。その思想内容が起倒流の『性巻』と関与するというところまでは判明したが、『性巻』の考察には至らなかった。今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 中嶋哲也	４．巻 18
２．論文標題 起倒流における名辞「柔道」の出現とその背景：直信流との関係に着目して	５．発行年 2021年
３．雑誌名 講道館柔道科学研究会紀要	６．最初と最後の頁 13－30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 NAKAJIMA Tetsuya	４．巻 65
２．論文標題 Relativization of the Kata Concept of Ryoen Minamoto through Fieldwork:	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Taiikugaku kenkyu (Japan Journal of Physical Education, Health and Sport Sciences)	６．最初と最後の頁 1～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5432/jjpehss.19047	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Nakajima Tetsuya	４．巻 6
２．論文標題 Japanese martial arts and the sublimation of violence: An ethnographic study of Shinkage-ryu	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Martial Arts Studies	６．最初と最後の頁 62～74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18573/mas.68	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中嶋哲也
２．発表標題 源了圓の「型」論再考： 新陰流の稽古法を事例にして
３．学会等名 日本スポーツ人類学会第19回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関